

鳴門市大麻町谷口山の組合式箱形石棺と 徳島県内の組合式箱形石棺について

立 花 博

1. は し が き

この組合式箱形石棺は、昭和41年1月12日、土地所有者の谷口豊氏が盆栽用の松を採取中、偶然地中より蓋石を発見し、県教育委員会に届け、その依頼をうけてただちに調査したものである。

2. 位置と考古学的遺跡環境

(1) 地理的位置 (図1)

石棺の発見された谷口山は、鳴門市大麻町松35番地にある。

大麻町は、徳島市の中心より北西約12キロメートルの距離にあり、北は香川県と境をなす讃岐山脈南は吉野川の旧河道にはさまれ、東西に開けた沖積平野が大半を占め、古来より農業のさかんな地域である。また吉野川の北岸を東西に結ぶ交通の要所でもあった。この大麻町の西端で、西に隣接する板野町との境をなす尾根が谷口山で、この近辺を松とよんでいる。

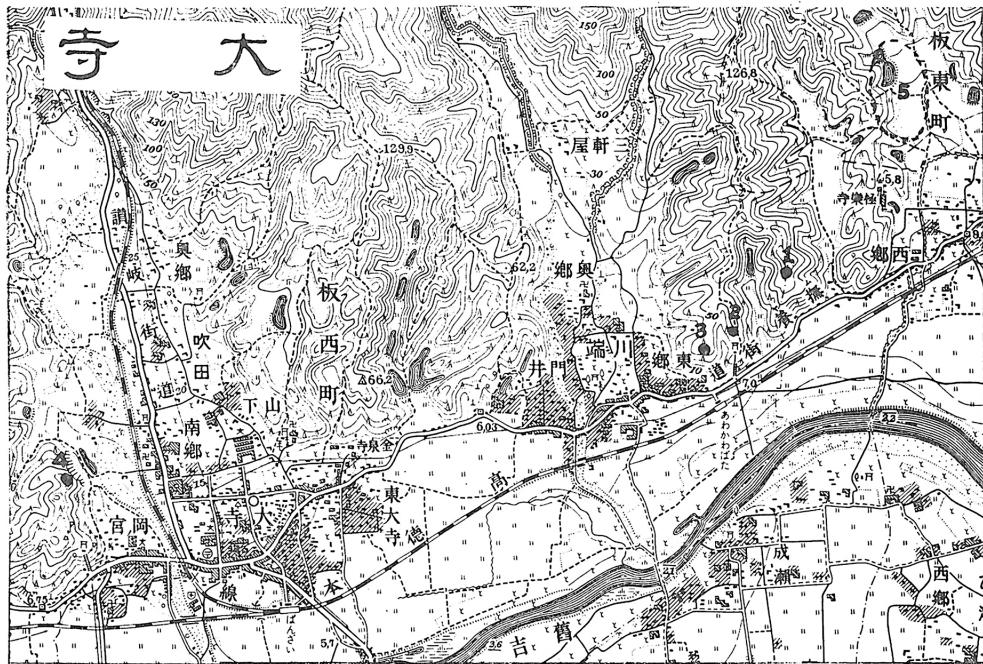


図1. 1. 谷口山古墳 2. 諏訪山石棺 3. 愛宕山古墳 4. カンゾウ山古墳 5. 旧陸軍演習地

(2) 考古学的遺跡環境

縄文文化時代の遺跡の確認はまだされていない。弥生文化時代の遺物の一つである銅鐸が、この谷口山のすぐ東の谷の西谷から出土したといわれている。古墳時代の遺跡は多く、すぐ西の隣接尾根の

頂部に数基の古墳があり、またその西に隣接する尾根先端頂部には、本県の代表的前期古墳の一つである愛宕山古墳がある。谷口山の東方には、萩原古墳（横穴式石室）、天河別神社古墳、宝幢寺山古墳（前方後円墳）などが山麓一帯にならび、その間にもいくつかの古墳が点在している。また、谷口山の東隣の極楽寺山の東麓一帯は、旧陸軍演習地であった。その谷にのびる小舌状丘陵地には、多くの組合式箱形石棺の存在が知られていたが、今ではすべて破壊されてしまったといわれる。このように、大麻町を中心とした一帯は古墳が多く、県内の中でも古墳分布上最多密地の一つであるといえる。歴史時代に入っの遺跡も布目瓦の出土がみられ、寺院址と推定されているところもある。このように古墳時代以降の遺跡の多い中に谷口山の組合式箱形石棺が位置づけられる。

3. 埋 葬 施 設

この組合式箱形石棺は、谷口山の頂上から南に下がる斜面に設けられたものである。

(1) 外 形

封土状のものは、全くみられず、外観は、頂上からさがる比較的急な自然の傾斜面としか見えない場所にある。

(2) 埋葬施設

比較的急な斜面の地表下（約50cm(N)～約40cm(S)）に地山に達する土壇を設け、結晶片岩の板石を用いて石棺を構築しており、これを被護すると考えられる特別な遺構は見あたらなかった。

(3) 石棺の構造

・ 蓋 石

長さ40～50センチメートル、幅約20～40センチメートルのはぼ長方形に近い形で厚さ10センチメートル内外の緑色片岩の板石を、棺の長軸(E-W)に対して直角の方向に9枚で棺を覆い、西端部の2枚は二重となし、それぞれの蓋石のすき間は、小さな板状の石をのせたところもあり、小さい間隙には粘土を用いてふさぎ、また中央は、長軸と同方向に3枚の板石を用いて二重にしてあり、蓋石は綿密なつくりといえる。蓋の最長部で210センチメートルあった。

・ 長側石と短側石

石材は、蓋石と同様に結晶片岩（緑色片岩と紅簾片岩を併用）を使い、南の長側石は6枚の板石、北側は5枚の板石で、縁の整った側を上縁にして剥離方向を横に、平つぎに並べたてて石棺を構築している。しかし、南の長側石のうち2枚は剥離方向を縦に用い、重ねつぎにしてある。これは上縁を整えるためであるとみられる。短側石は、それぞれ東・西に1枚ずつを用い、長側石内にはさまれた構造であり、全体的に形態はいびつであり、精巧な構造とはいえないが、長側石の上縁は、きわめて整った組合式箱形石棺である。内法の長さは北側で179センチメートル、南側で172センチメートル、幅は東端上部で40センチメートル、底部で43.5センチメートル、西端部上縁で35.5センチメートル、底部で37センチメートルあり、東端部および底部が僅かに広い。深さは25センチメートルでこれらの石棺としては比較的浅いものである。長短側石および蓋石には、石材を加工した痕跡もまた赤色顔料

の塗布も認められない。

• 石棺内の構造

石棺底は、地山（頁岩層）の上に約5センチメートルの厚さで粘土を敷き、その上に、厚さ1～1.5センチメートルの薄い小板石を20数枚使って一重にすき間なく敷きつめ底石としている。東の短側石に接して、約5センチメートルの様な厚さを持ち、平面がほぼ台形の石を置き、石枕としての役割をさせている。この石枕には加工の痕跡はみられず自然石である。

遺体は、頭を東にし、石枕にのせ、伸展した状態で葬られており、頭骨の後頭部、下顎骨、上膊骨、大腿骨の一部が残存していた。人骨は未鑑定である。

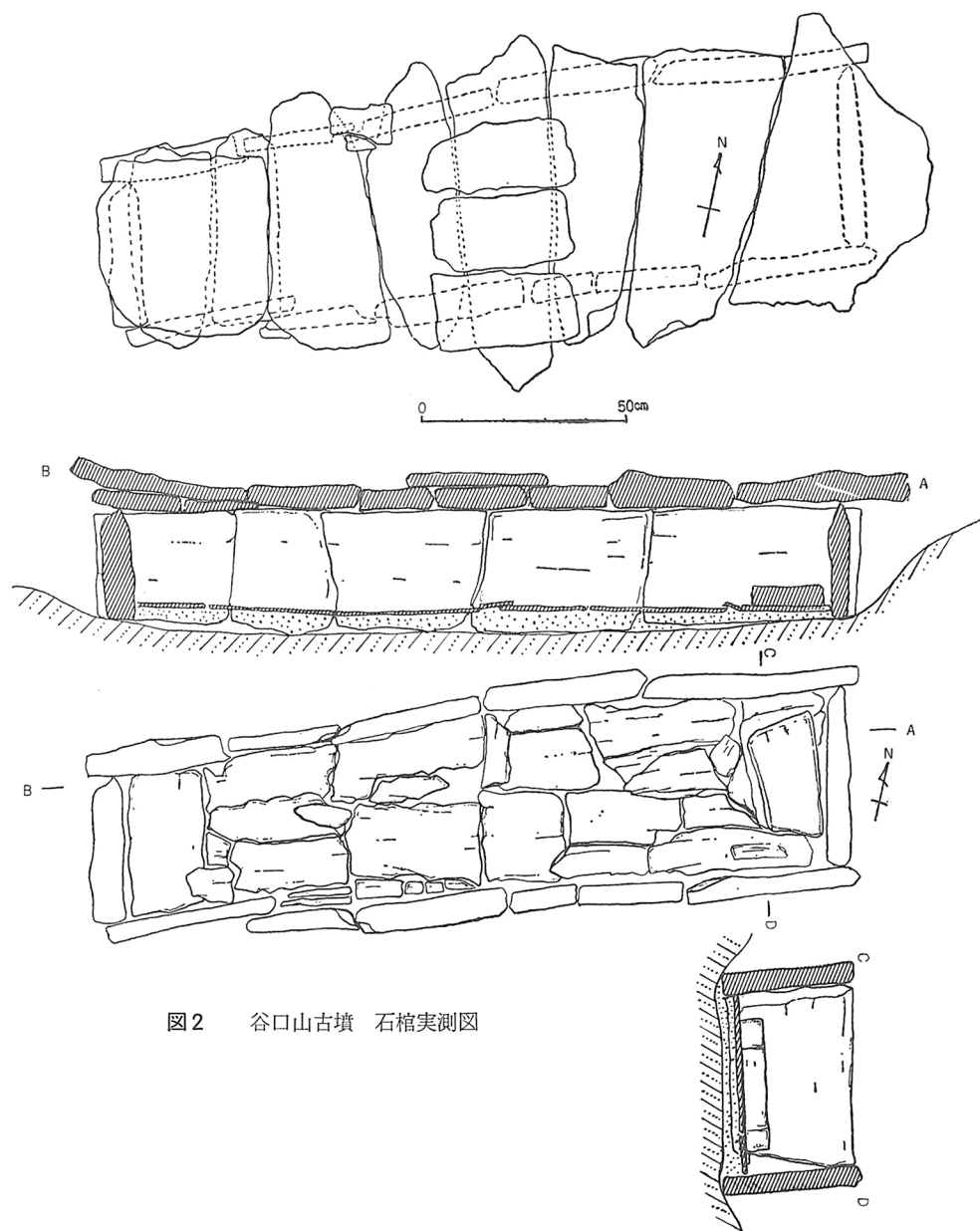


図2 谷口山古墳 石棺実測図

4. 副 葬 品

石棺外に副葬品は見られず、棺内に次のものが納置されていた。(図3)

刀子 1

大刀 1

(刀子) 棺内東端に近い位置、すなわち遺体の左肩にあたるところで、鋒を外に向けて納置されていた。

刀子は、全長11.1センチメートル、そのうち4.3センチメートルは柄部で、この部分は、鹿角によって装具したものである。身部は、刃の部分が身の幅の半ばまで腐蝕欠損し、長期にわたって使用したものを納置したと考えられる。棟の厚さは、0.6センチメートルある。

(大刀) 大刀は、棺の西短側石から20センチメートル、南長側石から5センチメートル離し、刃を内に向け、ちょうど佩刀したような状態で納置されていた。

大刀は、全長は91.8センチメートルあり長い大刀である。そのうち、17.5センチメートルは茎で、茎先から9.7センチメートルは茎の中央に目釘孔が一孔穿たれている。茎の両面には、木質の腐蝕残片が付着しており、木装の大刀であったと思われる。刀身部身幅3.5センチメートル、棟の厚さ0.8センチメートル、無反り、平棟、平造りの鉄製の大刀である。鞘部は、明らかではないが、木装であったと考えられる。

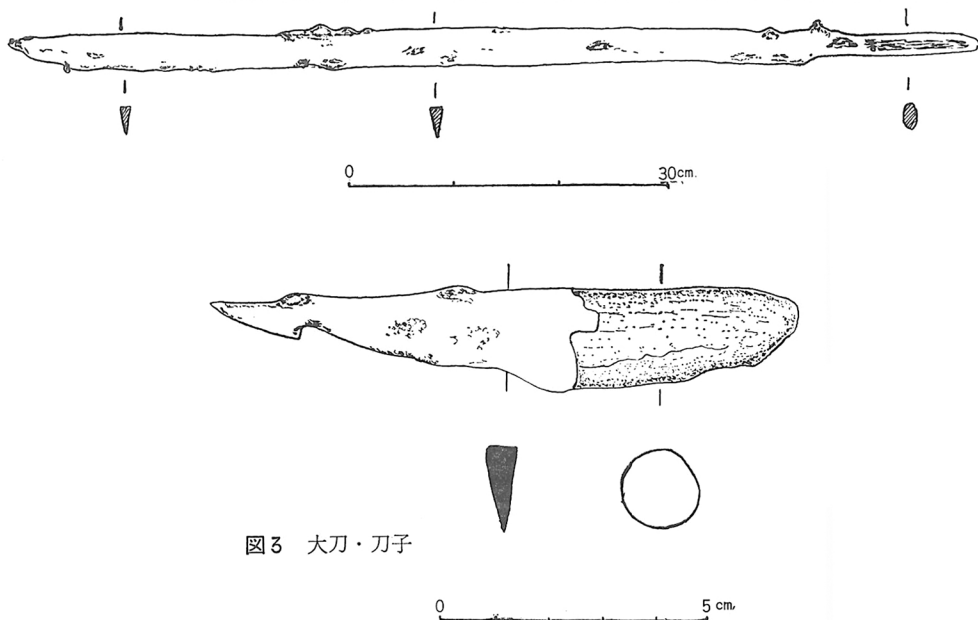


図3 大刀・刀子

5. 考 察

以上、谷口山の組合式箱形石棺について、その外形、埋葬施設の構造および副葬品について略述してきたが、本県内には、これらの組合式箱形石棺は多く知られている。それらを総合的にとらえながら、時代性、地域性を考えていきたい。

(1) 本県内の組合式箱形石棺の調査

埋葬施設としての組合式箱形石棺の存在ははやくから知られ、明治時代には“徳島近傍七ツ山及び丈六山ノ石棺”^{註(1)} “徳島近傍の石棺”^{註(2)} の報文がみられる。これらの報文によれば、七ツ山の古墳の埋葬施設は、箱形石棺であり、短側石は、長側石の外側からあてがったものであり、しかも、それぞれ2枚を平つぎにした特殊な構造の組合式箱形石棺であった。また丈六山の石棺の1つは、長側石と短側石を柄組みにした精巧なものであり、他の1つも、1枚の底石上に長・短側石を組み合わせた石棺であったことが記されている。また、箱形石棺の調査に基づき構造の分類も試みられている。

大正年代にはいり、笠井新也氏の“阿波式石棺”の提唱を機に喜田貞吉博士との間に、その呼称をめぐって誌上討論が行なわれたことがあった。このことが今にいたるまで、“阿波式石棺”の名で呼ぶ人があるのも、この論争が大きな影響を与えたことがうかがわれる。

昭和年代にはいり、板野郡板野町の“カンゾウ山古墳”^{註(4)} 名西郡石井町の“石井町の石棺群”^{註(5)} の調査報告がなされている。“カンゾウ山古墳”は、その石棺内に直弧文様のある鹿角製の刀剣と棺外に十数本の鉄鏃が副葬されていたこと、“石井町の石棺群”に石井町にある石棺の所在地とそのうちの一つである横林の石棺の調査が報告されている。

戦後になり、古墳の調査も進み、組合式箱形石棺の埋葬施設をもつ古墳の調査も「石井廃寺址」^{註(6)} の調査の機に、近くの石井町内谷、利包の組合式箱形石棺、徳島市八万町の宅地造成工事に伴う恵解山古墳(1～9号墳)^{註(7)} の調査、名東町節句山古墳^{註(8)}、名西郡石井町清成の土取工事に伴う調査^{註(9)}、同町尼寺の盗掘された古墳^{註(10)} の調査、また、紀淡・鳴門海峡地帯の考古学的学術調査^{註(11)} などによってその報告が次第になされるようになってきた。しかし、外部施設を伴わず、外観上特殊構造をもたないこれらの石棺は、明治、大正、昭和を通じ、開墾、土取・石取工事また近來の宅地造成などの土木工事によって破壊され消滅してしまったものも数が多い。これらは古老の話から察知することができる。

現在まで調査された組合式箱形石棺は、いずれも古墳時代に比定されるものであり、弥生文化時代に遡るものはいまだ確認されていない。

(2) 組合式箱形石棺の県内分布と石材

県内の組合式箱形石棺で調査報告されたもの、現存するもの、消滅しているが口碑の確実なものを含めると、およそ次のようなものがあげられる。(表1)これから、県内の正確な分布を知ることはいかなるにしても、大概の傾向を知る手がかりになると思われる。

これによると、組合式箱形石棺の分布の濃密な地帯は、吉野川沿岸と勝浦・園瀬川下流域であり、県南地方には、その存在がいまだ確認されていないのは大きな特異性といえる。

吉野川沿岸地方においても、その下流の徳島市国府町から麻植郡鴨島町にかけての地域(図4のⅡ)とその対岸の讃岐山脈の山麓にあたる板野郡板野町から鳴門市大麻町にいたる地域(図4のⅠ)に特に密集しており、上流に遡るに従いその数も減少し、美馬郡美馬町付近(図4のⅢ)で僅かに多くなることが知られる。また勝浦・園瀬川の下流にあたる、徳島市浜野町、勝占町、丈六町、八万町(図4のⅣ)にもその分布がみられ、県内を大きく3つの大密集地と1つの小密集地とに別けることができる。

表 1

No.	名称	所在地	立地	方位	材質	外護施設	構				造			法 量 (法内)		副 葬 品
							長側石	短側石	蓋石	棺底	副室	その他	長さ	幅	深さ	
1	新官塚古墳	徳島市 淡野町	小舌状丘陵 最先端 頂部	E-W	緑色片岩	円墳	1枚	1枚	1枚	板石		赤色顔料	178.7	54.2	66.6	乳文鏡 1 刀 4 管玉 19 剣 2 なつめ玉 2
2	熊山 1 号墳	" 勝占町	独立丘陵 面		"		"	"	"				96	48	39	
3	七ツ山古墳	"	独立丘陵 部		"		3枚	2枚	3枚							刀?
4		" 論田町			"		2枚	1枚	2枚	礫敷			154	46 41	25	
5	恵解山 1 号墳	" 八万町	丘陵頂部		"											五獣鏡, 鉄鏃, 甲の残 欠, 刀, 衝角付冑, 剣
6	" 2 号墳東棺	"	"	NW- SE	"		1枚ずつ	1枚ずつ	1枚	板石敷		赤色顔料 蓋石加工 痕	168	52(N) 50(S)		鏡, 勾玉, 小玉, 白玉 鉄刀, 鉄鏃, 鉄斧, 刀 子, 竹製漆塗櫛
7	" 西棺	"	"	"	"		"	"	"	有 長側石 共通		赤色顔料	176	40(N) 56(S)	48.5 (N) 51(S)	(棺内) 琴柱形石製品, 管玉, 竹製漆塗櫛, 鉄刀子, 鉄剣 (鹿角装) 鉄剣, 布 (副室) 甲残欠, 衝 角付冑, 鉄刀, 鉄剣, 鉄鏃, 鉄斧, 鉄鏃
8	" 8 号墳東棺	"	"	"	"		2枚(E) 3枚(W)	"	2枚				197	42 37	40 34	鉄刀, 鉄剣, 鉄斧, 鉄 鏃

9	西棺	"	"	"	"	"	"	2枚(N) 3枚(S)	1枚ずつ	1枚 加工痕	大・小 板石敷		赤色顔料	194	51 38	35 36	(棺内) 櫛、鉄剣、鉄のみ、鉄刀 (棺外) 鍛先形鉄器、鉄斧
10	" 9号墳南棺	"	"	"	N-S	"	"	堅穴式石 室	1枚ずつ	1枚 加工痕	小板石敷		赤色顔料	160	40(N) 43(S)	28(N) 35(S)	(棺内) 銅鏡、鉄刀 (棺内) 鉄刀子、鉄鏃、鉄斧、 鉄鏃、勾玉、白玉
11	恵解山 9号墳 北棺	徳島市 八万町	舌状丘陵 先端頂部	E-W	"	緑色片岩	"	2枚ずつ 重ねつき	"	2	小板石敷			114	33(E) 20(W)	23	管玉、白玉 (棺外) 鉄刀
12	節勾山 2号墳	" 名東町	舌状丘陵 頂部	"	"	堅穴式石 室	"	2枚ずつ	"	1 加工痕	小板石敷			151	49 30	40 35	四獣鏡、勾玉 (棺外) 鉄剣、鉄斧、鉄鏃、刀子
13		" 国府町 源田	舌状丘陵 頂部	"	"	"	"	3枚ずつ	"		砂利敷			300	120		玉
14		" 国府町 奥谷69	丘陵頂部	E-W	"	"	"	1枚ずつ	"	1枚		有 東短側石 共通					袋形土器 1 提瓶 1 杯 5
15		" 70	前方後円 墳前方部	N-S	"	"	"	"	"	2枚				185	37		玉 刀
16	城山神社 古墳	" 114	舌状丘陵 頂部	"	"	堅穴式石 室	"	1枚ずつ	石室の側 石共通		石枕						提瓶、馬具、高杯、 刀、斧、玉、埴
17		名西郡 石井町 内谷	尾根上	E-W	"	"	"	"	1枚ずつ	1枚	粘土						石釧
18		"	舌状丘陵 斜面	"	"	"	"										杯、提瓶、埴、玉
19		"	"	"	"	"	"							210	70		
20		"	"	"	"	"	"										鉄刀 玉類 5

21	名西郡 石井町 尾寺	舌状丘陵 頂部	E-W	緑色片岩	石炭 (緑色片 岩)	3枚ずつ	1枚ずつ		石枕		194	52 41	25	管玉4 ガラス小玉17 (棺外) 有蓋短頸壺1
22	" 利包	尾根												白玉
23	" 高良	舌状丘陵 最先端頂 部	E-W	"		2枚ずつ	"	1枚	砂質粘土	赤色顔料	187	38	43	(棺外) 鉄剣5 鉄斧1 鉄製品破片1
24	" 前山	"	E-W	"		"	"	2枚			177	48(E) 44(W)		須恵器, 金環, 玉類
25	"	"	"	"		"								
26	" 清成	"	N-S	"		1枚ずつ	1枚ずつ	1枚	砂質粘土	赤色顔料	167	40(N) 37(S)	43(N) 47(S)	倣製内行花文鏡 鉄製品
27	"	舌状丘陵 最先端斜 面	E-W	"		1枚ずつ か	1枚ずつ か	"	粘土			40	30	
28	" 横林	舌状丘陵 先端		"		1枚と 2枚	1枚ずつ	"	2枚の板 石敷		5尺8寸 1尺2寸	1尺4寸 1尺2寸	1尺2寸	鉄刀
29	麻植郡 鴨島町 上浦	段丘上	E-W	"	円墳	2枚ずつ	"	8枚	粘土		120	46(E)	33	
30	" 森藤	段丘斜面												鉄刀
31	" 東禅寺	丘陵斜面		緑色片岩				1枚						須恵器
32	" 川島町 山田	段丘上	E-W	"		1枚ずつ	1枚ずつ	1枚						鉄剣 鉄斧
33	" 山川町 住吉	段丘上			円墳	"	"	"			182	60	45	
34	" 山川町 麦原	"												土器 刀剣 武器

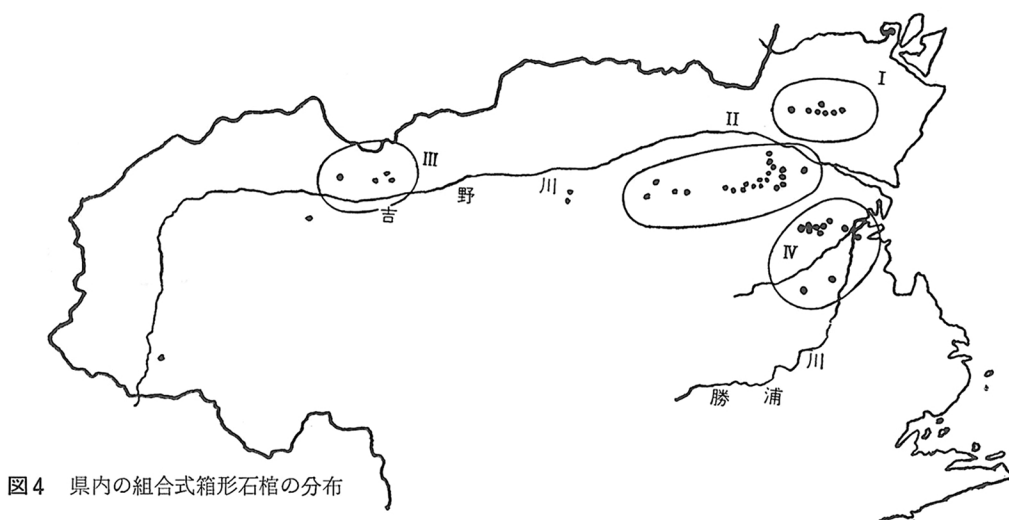


図4 県内の組合式箱形石棺の分布

県内の組合式箱形石棺には、すべて結晶片岩の板石が用いられており、この結晶片岩は、Ⅰ、Ⅲの地域には産出せず、Ⅱの地域がその産出地であり、Ⅳの地域は、その産出地に隣接した所といえる。すなわち、本県を地質構造上からみると、県北を東流する吉野川に沿って中央構造線がとおり、これを境にして、内帯と外帯に区分されている。香川県との境をなす讃岐山脈は、内帯に属し、和泉層群と呼ばれ、淡路の南端を通り、大阪の和泉山脈につづくもので、この層群は、基盤岩石は花こう岩で、基底礫岩、頁岩、砂岩からなっており、山麓は、洪積層の台地、扇状地からなっている所もある。従って結晶片岩は産出しない地域である。吉野川南岸一帯は、外帯に属し、本県中央にある剣山を含めて東西に走行する剣山山系の北斜面は地質上、長瀬系とよばれる地質構造であり、県西の三好郡から徳島市の眉山に至るまでこれにあたる。この長瀬系の地質は、結晶片岩層からなり、緑泥片岩、黒色片岩、紅簾片岩は、その代表的な岩石である。讃岐山脈に沿って存在するⅠ、Ⅲの地域の石棺、横穴式石室、竪穴式石室に用いられている結晶片岩は、すべて、吉野川南岸から運んだものとみるべきである。

(2) 組合式箱形石棺の立地と外部施設

組合式箱形石棺の埋葬法にいくつかの方法がみられる。立地上、丘陵の先端頂部、尾根に設けられたものと山麓の斜面、丘陵の斜面に設けられたものとに大別できる。(表Ⅰ参照)

山麓、丘陵の斜面に設けられた石棺は、封土はなく、その他の外護施設もなく、直葬されたものである。丘陵上、あるいは、その先端頂部、尾根の脊梁部に設けられたものには、何らかの外護施設をもつものが多いことが見うけられる。それには竪穴式石室、横穴式石室を構築したもの、石棺全体を石積み、封土で被覆したものがみられる。

(竪穴式石室の外護施設をもつもの)

石棺の四周を竪穴式石室で被覆したものには、徳島市名東町節句山2号墳、同八万町福万谷恵解山9号墳および同国府町矢野城山神社古墳があげられる。城山神社古墳は、昭和15年ごろ石取工事によ

って損壊された古墳である。舌状にのびる丘陵の最先端頂部にあり、結晶片岩の割石をもって、平面がほぼ正方形に近い竪穴式石室を築き、その石室内の中央に緑泥片岩の板石2枚で長側石をつくり、短側石は、石室の側壁と共通したものであり、中央の棺には、石枕を置き遺体を納置し、石室の側壁と石棺の長側石との間には、武具の類、他の一側には須恵器を納めてあったといわれている。^{註(12)}

(横穴式石室の外護施設をもったもの)

石棺の四周を横穴式石室で被覆したものに美馬郡美馬町願勝寺1号墳が知られている。石室内に緑色片岩の2枚の長側石を用い短側石は石室の側壁と共通したものである。^{註(13)}

(石積の外護施設をもつもの)

土中に石棺を直葬し、石棺全体を石積みで被覆したと考えられるものがある。鳴門市大麻町萩原「ケンレイサン古墳」名西郡石井町尼寺の古墳、また美馬郡美馬町喜来にあった石棺にみられる。^{註(14)}

「ケンレイサン古墳」は、大麻町の光勝院の東にある丘陵の尾根にある組合式箱形石棺である。これは、数十年前に知られ、それ以後、原状のままに残したといわれている。石棺は、緑色片岩の板石を用いてつくり(石積みのため、使用枚数、大きさ不明)、石棺全体を砂岩の塊石、約30個ほどで覆っている。この石積みの上の封土の有無、副葬品については不明である。石井町尼寺の石棺は、西半部が盗掘にあい原状は不明だが、残存していた東半部の調査から、石棺を構築し、遺体を埋葬した後割石で棺の蓋石全体を覆い、盛土したものと思われる。石積みに使用した石材は緑泥片岩の割石である。また、美馬町喜来に埋葬されていた石棺は、「ケンレイサン古墳」と同じく、棺全体を砂岩の塊石で覆っていたといわれ、これ以外にも美馬町には若干例があったようである。これらの石積みを用いた石棺は、追葬が行なわれたとは思われず単次葬としての墳墓の性格をもっていたものであると考えられる。

(3) 組合式箱形石棺の副葬品

前にのべたように、組合式箱形石棺の破壊されたものも多く、その存在の記憶さえもうすれているものもある。したがって副葬品の散逸も著しく、残存する断片的な副葬品から詳細な年代的な位置づけをすることは困難であるがその手がかりを求めたい。

組合式箱形石棺に副葬されたものをあげれば表2のように示される。これらの副葬品を分類すれば④銅鏡、鉄製武器、武具、農工具および装身具をもったもの、⑤大刀、装身具および須恵器をもったものに大別できる(表2)しかし、No17のように凝灰岩製の石釧をもったものもあることは見のがせない。④の類型はNo6, 10, 12, があり、この範疇にNo1, 5, 6, 9がいれられ、またNo23, 26はともに盗掘された石棺であり、その副葬品全体は不明だが④の範囲にいれても大きな過誤はないと思われる。前述のように副葬品は断片的であるため、詳細な年代的な位置づけは不可能であるが、No17は古墳前期末中期初頭の畿内的な性格をもつ古墳の副葬品の様相をもち、④の範疇古墳中期的なものであり、⑥は後期以降のものと考えたい。

表 2

No.	石製品	鏡	鉄製武器				甲冑	馬具	鉄製農具					装身具		土器		その他	備考	
			大刀	剣	鏃	その他			鎌	斧	のみ	鉈	刀子	その他	玉類	環類	須恵			土師
1		○仿	○4	○2											○					赤
2																				
3			○?																	
4																				
5		○1	○2	○2	○27		○													
6		○1	○3						○1	○2			○1		○				櫛	赤
7	○琴柱		○2	○8	○98		○		○3	○8			○1		○				櫛	赤
8			○1	○1	○3					○1										
9			○1	○1						○1	○1			○1					櫛	赤
10		○1	○5		○40				○2	○4			○2		○					赤
11			○1												○					
12		○1		○1					○1	○2			○2		○					
13															○					
14																	○			
15			○												○					
16			○					○							○		○			
17	○釧																			人骨に朱
18															○		○			
19																				
20			○												○					
21															○		○			
22															○					
23			○1	○3					○1	○1										赤
24															}○	}○	}○			
25																				
26		○	○?		○?															赤
27																				
28			○																	
29																				
30			○																	
31																	○			
32				○						○1										
33																				
34			○				○										○			
35																				
36																				
37																				
38															○					
39															○					
40																				
41																○	○			
42																				
43																				
44			○	○	○															人骨に朱
45																				
46			○		○								○		○	○				
47																	○			
48																				

赤；赤色顔料使用

6. 総括

谷口山の石棺をもとに徳島県内の組合式箱形石棺の集成をし略述してきたが古墳中期以前と考えられる石棺は、丘陵先端頂部、尾根の脊梁部にあり、厚くて堅牢な1枚岩の板石を側石または、蓋石に使い、棺内に赤色顔料を用いることが共通していると思われる。特に銅鏡を埋葬した石棺にこの傾向がある。このような石棺は、Ⅱ、Ⅳの地域にあつまっている。Ⅰ、Ⅲの地域の石棺の側石、蓋石は

2枚以上の板石を用いたものが多く、また板石の厚さも薄い。副葬品からみてもⅠ、Ⅲの地域は、Ⅱ、Ⅳの地域と異なり、⑥に属するものがほとんどであり、古墳後期以降に比定されるものであるといえる。したがって、Ⅱの地域は古墳時代の前期末中期初頭から後期を通じてつくられた埋葬施設であり、Ⅳの地域は中期以降のものであり、Ⅰ、Ⅲの地域は堅牢な1枚石を用いていないとはいえ、政治的・軍事的、経済的支配層の墳墓と考えられる横穴式石室をもつ古墳があり、それには巨石が用いられている。これからみるとこの地域の組合式箱形石棺の構造は地域的特性よりも、共同体内における階層分化のあらわれとしての墳墓と理解することが適切であろう。したがって谷口山の組合式箱形石棺は、終末期の階層分化の発展としての家父長的な者の墳墓として、またこれらの群集墓の中の一つとして位置づけたいと思う。

お わ り に

古墳時代の徳島を考えると、古墳時代に関する資料全般から考えねばならぬことはいうまでもなく、組合式箱形石棺という非常に狭い限られた分野からみて、これを論ずることは大きな過誤をおかすことはまぬがれない。しかし、古墳時代の認識の方法論の一つの試みとしてとりあげ、古墳時代を把握しようとしたもので、諸氏のご叱正をうける次第である。

最後にいろいろご指導をうけた、秋山泰氏、石川重平氏、津田快洞氏、佐藤忠邦氏および本県の埋蔵文化財調査に貴重な資料を提供していただいた方がたに深く感謝の意をあらわしたい。

〔註〕

1. 東京人類学会報告 第62号「徳島近傍セツ山及ビ丈六山ノ石棺」香川槐三
2. “ 第63号「徳島近傍ノ石棺」鳥居竜蔵
3. 考古学雑誌 第5巻第7号, 第9号, 第10号, 第11号
4. 徳島県史跡名勝天然記念物調査報告 第1
5. “
6. 吉川弘文館「石井」昭37
7. 徳島県文化財調査報告書 第9集, 第10集, 昭和41, 43
8. “ 第9集 昭41
9. 石井町文化財調査報告書 第4集 昭44
10. “ “
11. 紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告, 同志社大学文学部文学科 1968
12. 石川重平氏の教示による
13. 古代学研究56 「徳島県美馬郡願勝寺1号墳」石丸洋 1969
14. 津田快洞氏
15. 「渡野の古墳」渡野町公民館
16. 三野町の文化財 第1集